奄美大島西部地域集落における信仰祭祀の空間秩序

集落の空間構成原理に関する研究 その2

THE SPACE ORDER OF RELIGIOUS RITES IN THE SETTLEMENTS
IN THE WEST DISTRICT OF AMAMI-OHSIMA

A study on the space structure of settlements Part 2

永田隆昌*1, 高見徹志*2, 松永 達*3, 九十九 誠*4
Takamasa NAGATA, Takashi TAKAMI, Toru MATSUNAGA
and Makoto TSUKUMO

This study clarifies the space order of the religious rites in the west district of Amami-ohshima through the analyses of the site structure of "Myah-the precincts" and the function and the shape of "Ashyage and Toneya-the shrines". The summary of the result is as follows:

1. The conception of counterpart between "the front and the back", "the formal and the casual" and the conception of directional aspect to "Neriya-the other world beyond the horizon" and "Kamiyama-the holy hill" form the space structures and the shape of those facilities.
2. These conceptions apply to the space order of the whole settlement.

Keywords : *Amami, Settlement, Religious rites, Space structure, Directional conception, Myah*

奄美, 集落, 信仰祭祀, 空間構成, 指向性, ミヤー

1 研究の目的と構成

本研究は民家および集落の空間構成原理に関する実証的研究である。本研究の目的は、集落の原型が比較的良好に残っている奄美大島の集落を対象として、民家および集落の空間構成を把握し、その空間構成原理を究明することである。前稿¹⁾では、奄美大島の伝統的な平面形式をもつ分棟型民家の空間構成の分析結果から、分棟型民家に内在する空間秩序を明らかにした。

本稿では奄美大島西部地域²⁾の集落を対象として、近年まで行われてきた信仰祭祀や年中儀礼に基づく居住者の空間概念が信仰祭祀空間や集落空間をどのように秩序づけてきたかを両者の関係を検証することによって明らかにする。

奄美の基層文化は農耕を基盤として成立してきたため、信仰祭祀も年中儀礼も米や芋等の農作物の豊作祈願と収穫感謝を中心に行われてきた。また、奄美の信仰祭祀や諸儀礼の特色の一つは、人々の先祖崇拝観念が強く、これらの儀礼のほとんどが先祖の祭りに結びついていることである。もう一つの特色は、ノロ・ユタ等の女性祭祀者が祭祀の多くを取り仕切ってきたことである³⁾。

このような祭祀が行われる場所としては、カミヤマ⁴⁾、神社、ミヤー⁵⁾、アシャゲ⁶⁾、トネヤ⁷⁾ (グジ⁸⁾ 屋敷)、ハマ (浜)、カミミチ⁹⁾、墓所等がある。本稿では、このうち南西諸島における集落の

信仰祭祀空間の特色をよく表し、本地域に多く現存するミヤー、アシャゲ、トネヤの空間秩序を中心に論考する。

2 本稿の研究課題と研究方法

本稿では、(1) 個々の信仰祭祀空間の空間秩序と(2) これらの信仰祭祀空間群の空間秩序を次の6点より明らかにする。

- 1) ミヤーの配置構成
- 2) アシャゲの機能と形態
- 3) トネヤの機能と形態
- 4) アシャゲとトネヤの関係
- 5) その他の信仰祭祀空間の種類と形態的特徴
- 6) 信仰祭祀空間群の配列

1)～4)では本地域における集落の中心的祭祀空間であるミヤー、アシャゲ、トネヤの形態上の特徴および空間秩序を明らかにする。

5)では本地域における信仰の主対象となってきたカミヤマと居住域境界付近に設けたカミヤマの拝所 (ウガンヤマ、神社等) やハマ、墓所とそれらを結ぶカミミチや葬列のミチ等の概要と形態的特徴を明らかにする。

- 6) では以上の信仰祭祀空間群の配置構成原理を明らかにする。

*1 九州共立大学工学部建築学科 助教授・工修

*2 西日本工業大学工学部建築学科 教授・工博

*3 麻生工科専門学校建築学科 博士(工学)

*4 西日本工業大学建築学科 講師・修士(学術)

Assoc. Prof., Dept. of Architecture, Kyushukyokuritu Univ., M. Eng.

Prof., Dept. of Architecture, Nishinippon Institute of Technology, Dr. Eng.

Dept. of Architecture, Aso College of Technology, Dr. Eng.

Lect., Dept. of Architecture, Nishinippon Institute of Technology, M. Philos.

3 調査方法

以上の研究目的および研究方法から、集落の信仰祭祀空間に関する調査は、アシャゲまたはトネヤが残されている 21 集落（表 2）を対象として、第 2 章の 1）～5）の項目について表 1 の方法で行った。

表 1 集落の信仰祭祀空間調査一覧

調査項目	調査方法	調査期間
ミャーの配置構成	現地での目視調査 一部実測	1999.8.2000.8. 2001.11
アシャゲの平面・立面	平面・立面の実測	同上
トネヤの平面・立面	平面・立面の実測	同上
その他の信仰祭祀空間の種類・位置・形態	現地での目視調査 一部実測及び聞き取り	同上

(注) 1. ベースマップは瀬戸内町・宇検村作成集落図(1/4000～1/1000)発行年不詳

4 既往研究からみた本稿の位置付け

4.1 ミャー、アシャゲ、トネヤの形態と機能

南西諸島の集落における信仰祭祀に関する研究は、民俗学の分野において蓄積が進んでいる¹⁰⁾。一方、信仰祭祀空間の空間秩序について論考した既往研究は少ない。特に、信仰祭祀空間の形態と機能を体系的に捉えた研究は極めて少ない。但し、形態と機能をそれぞれ別々に、あるいは祭祀空間の種類別に捉えた研究は、建築学と民俗学の分野で若干みられる。本研究で参考にした既往研究は、次の通りである。

ミャーの形態に関する文献は、その配置構成を含めてほとんどなく、奄美では木慈¹¹⁾と阿室¹²⁾、沖縄では伊是名島¹³⁾と久高島¹⁴⁾のミャーの配置構成が紹介されている程度である。ミャーの機能に関しては、民俗学の文献に散見される¹⁵⁾。

アシャゲの形態に関しては、その建築的特色を基に類型を試みた池浩三氏の研究¹⁶⁾と森本伊知郎氏の研究¹⁷⁾がある。池氏は南西諸島における神祭りと祭場との関係を整理した上でアシャゲを差屋型、穴倉型、伏屋型に 3 類型している¹⁸⁾。森本氏は宇検村、加計呂麻島のアシャゲの建築概要を整理した上でアシャゲを 5 類型している¹⁹⁾。これらの研究は、アシャゲの形態と機能を過去に遡って捉える上で、またアシャゲの建築的諸類型の系譜および変遷過程を捉える上で極めて示唆に富む研究である。アシャゲの機能に関しては、民俗学の分野の研究がある²⁰⁾。

トネヤの形態に関しては、建築学と民俗学の分野で記述されたものがあるが²¹⁾、その形態を図面で表したもののや類型化したものは少ない。トネヤの機能に関しては民俗学の分野の研究がある²²⁾。

アシャゲやトネヤの機能や形態に関するこれらの研究は、本来の機能の大部分を失ってしまった現在、アシャゲやトネヤの本来の機能や姿を想起させ、本研究の目的とするその空間秩序を解明する上で示唆に富む研究である。

4.2 ミャー、アシャゲ、トネヤの相互関係

ミャーの配置構成や神祭りの際の役割分担などミャー、アシャゲ、トネヤの相互関係は、ミャーの空間秩序を知る上で重要である。これに関する文献は少ない。既往研究によって明らかになっている点は次の通りである。

ミャー、アシャゲ、トネヤはいずれも集落の神祭り、ノロ祭祀の際にノロ、グジヌシ等が集まり、祭りが行われる場である²³⁾。但し、それぞれの役割は異なるとともに、その実際の使われ方にはミャーごとの差が若干みられる²⁴⁾。

アシャゲとトネヤの関係について、池浩三氏と小野重朗氏は神祭りの種類（季節）によるアシャゲとトネヤの使い分けを整理した上でアシャゲとトネヤは元来ミャーの中に設けられた一組の施設であること、古くは宗家（グジ屋敷）がミャー、アシャゲ、トネヤの機能を有していたことを指摘している²⁵⁾。

本稿の意義は、池浩三氏が 1973 年に行ったアシャゲの調査²⁶⁾から 30 年を経たアシャゲの現状を含めて、これまでの既往研究ではほとんど論じられなかった集落の中心的信仰祭祀空間であるミャー、アシャゲ、トネヤの空間構成をその種類別かつ体系的に捉えることによってこれらの信仰祭祀空間に内在する空間秩序を明らかにすることにある。

5 ミャーの配置構成にみられる空間秩序

5.1 ミャーの機能

表 1 の調査結果および文献¹⁵⁾から、ミャーの機能をまとめると次のようになる。ミャーは庭の意で集落の神祭り、ノロ祭祀のための広場である。ノロ祭祀が行われなくなった現在は、八月踊りや奉納相撲が行われるくらいで、日常的には居住者の談笑や集会・催しの場となっている。

5.2 ミャーの空間構成要素

(1) ミャーの空間構成要素の種類

ミャーに共通する基本的空間構成要素は、アシャゲ、トネヤ、土俵、大樹、カミミチである。ハマに近いミャーには、ハマジョーグチ（浜門口）が付加される。（表 2）このハマジョーグチは、集落が孤立していた時代には集落と異界を結ぶ集落の門としての機能をもっていたと考えられる。これらの空間構成要素の形状は、カミミチのみが線であり、他の要素は点である。

表 2 ミャーの空間構成要素

集落名 (ミャー名)	ミャーの空間構成要素					
	アシャゲ	トネヤ	土俵	大樹	カミミチ	その他
実久 フードネ	1	0	1	1	1	2
実久 コドネ	1	0 (跡)	0	0	1	0
芝	0	1	1	1	1	1
薩川	1	1	1	0	1	2
瀬武	0 (離)	0	1	1	0	1
木慈	1	1	1	1	1	1
武名	1	1	1	1	1	2
三浦	1	1	1	0	1	1
瀬相	1	1	1	0	1	1
俵	0 (跡)	0 (跡)	1	0	1	2
知之浦	0	0	1	0	0	1
西阿室 里	0 (跡)	0 (跡)	0	1	1	0
西阿室 金久	0 (跡)	0 (跡)	0	1	0	2
阿多地	1	1	1	1	1	3
須子茂 里	1	1	1	1	1	3
須子茂 金久	1	0 (跡)	0	0	1	1
嘉入 里	1	1	0	0	1	2
嘉入 金久	1	1	1	1	1	2
於斎 上	0 (跡)	1	0	0	1	0
於斎 下	0	0	1	1	0	1
花富	0	0	1	1	1	1
勝能	0	1	0	0	1	0
西古見	0	0 (跡)	0	0	1	0
阿室	1	1	1	1	1	1
屋鈍 上	0	0 (離)	0	0	1	0
屋鈍 下	0 (跡)	0	1	1	0	2
宇検	0 (離)	0 (跡)	1	0	1	0
合計	21 集落					
	27 ケ所	13	13	18	14	22
						32

(注) 1. 表中の数字はヶ所数を示す。単位：ヶ所

2. (跡) は過去に存在していたことが文献で確認されたもの。

(離) はミャー内にはないが、近接した場所に現存するもの。

3. 「その他」はハマジョーグチ、神石、公民館など。

(2) トネヤの建築様式によるミャーの類型

トネヤの建築様式はアシャゲと違って一般民家と大差なく、主棟（オモテヤ）と副棟（トーグラ）に分かれる分棟型が主であった。主棟は神祭りをを行う祭場となり、トーグラで神饌を調理する²⁷⁾。現在は一棟化したものもある。

ミャーをトネヤの建築様式によって類型するとA～Eの5タイプになる。（表3、図1）

Aタイプは分棟型トネヤをもつタイプであり、この場合、グジの住居をトネヤとして用いている。Bタイプは里のグジ屋敷内またはグジ屋敷に隣接して、別に一棟型トネヤが設けられるタイプである。Cタイプは一棟型トネヤを持つタイプである。Dタイプはミャーの空間構成要素が分散配置されているもので、ミャーの範囲が広範囲に広がっているもの、もしくはこれらの要素が何度か移動した結果生じたものである²⁸⁾。Eタイプはトネヤの過去の存否が不明のもの、もしくは過去に存在したことは確認できたが、その位置や形態が不明なものである。

これらの各タイプに属するミャー数の差を、集落の空間概念モデルの型²⁹⁾によってみると、B、Cタイプでは海岸線交差型が多く、海岸線平行型A、D、Eタイプでは差が小さいことが分かる。（表3、図2）

里はカミヤマを背にして旧家が集中する集落の発生地である。この里のミャーにA、Bタイプが多い。このことから、この両タイプがミャーの原型に近いものとみなせよう。

5.3 ミャーの配置構成

(1) ミャーの空間構成要素の配列

ミャーをその空間構成要素の配列で類型化すると、I～VIの6タイプになる。これを信仰軸との関係で見ると次のような秩序が見出される。（表4、図1、図2）

1) これらの空間構成要素はほぼ信仰軸に沿って配列され、カミヤマに近い方からトネヤ>土俵>アシャゲ>大樹>ハマジョーグチの順に配列されたミャーが多い。（表4、図1のBタイプ、Cタイプ）

2) この配列順序は空間構成要素の数にかかわらず、A、B、C各タイプに共通して認められる。（表4） 実際、ミャーの半数近くがこれらの空間構成要素のうち、アシャゲ、トネヤ、大樹を現在は失っているが（表2）、その場合でも上記の配列は変わっていない。

3) 上記の配列は集落の空間概念モデルの型による差異は認められない。（表4）

4) 土俵は祭りや通過儀礼に際して屋外舞台としての役割を果たす屋外の中心的な祭祀空間であった³⁰⁾。そのため土俵はミャーの中央付近に設けられることが多く、その周囲をトネヤ、アシャゲ、公民館などが取り囲む空間構成をとる。（図1のBタイプ、Cタイプ）

5) 大樹はミャーの最も海寄りに位置する場合が多い。この場合は防風林として植樹されたものと考えられるが、嘉入の金久のように土俵の近くに植えられ、樹陰を提供しているものもある³¹⁾。

アシャゲとトネヤは、各タイプのミャーに共通して設けられていることから、ミャーの主要構成要素として捉えられる。また、ミャーの空間構成要素の配列には、トネヤを上位とみる信仰概念およびハマジョーグチを出入口・表とし、カミヤマに近いトネヤを奥とする表と奥の空間観念が投影されていると推察される。

6 アシャゲの機能と形態

6.1 アシャゲの機能

アシャゲの機能を総合的に考察すると次のようになる。アシャゲはアラホバナ、ミニャクチ³²⁾など稲作祈願を中心とする神祭りの場となる聖屋³³⁾であった。それ故に、居住機能はなく、これらの祭りの期間にはカミが滞在した。また、アシャゲは聖と俗、あの世とこの世の境や門としても位置付けられる境界建築でもあった³⁴⁾。アシャゲは現在、祭祀場としてはほとんど使われていないが、今でも聖屋として崇められ、修復や建替えが続けられている。

6.2 アシャゲの形態

このようなアシャゲの特異性に着目して、その形態について分析した。分析の対象としたアシャゲは、表2の21集落中12集落に存在している15棟のアシャゲである。

これらのアシャゲに池浩三氏の建築類型³⁵⁾を当てはめれば、穴屋型が嘉入の里と武名、瀬武の3棟、差屋型が実久のコードネ、阿多地、須子茂の金久、木慈、三浦、瀬相、宇検の7棟、伏屋型は該当なしでその他の5棟はRC造、S造などである。（表5その1、その2）

これらのアシャゲの形態上の特徴は、次の3点に要約できる。

- 1) すべて、正方形またはそれに近い矩形の平面形を持つ³⁶⁾こと。
- 2) 柱間にヌク（貫）を通す透過的もしくは何も無い開放的な立面をもつこと。
- 3) 高床と土間床に分けられること。

アシャゲの原型については「稲積み」説³⁷⁾が有力で、そこから次第に以上述べたアシャゲの機能上・形態上の特異性が形成され、集落の信仰祭祀の場としての形態が整えられてきたものと考えられる。

7 トネヤの機能と形態

7.1 トネヤの機能

トネヤはアシャゲと同じく集落の神祭りをを行う建物であり、祭りの期間にはカミが滞在する。トネヤがアシャゲと異なる点は、トネヤはグジやノロの住居として居住機能をもつこと、神祭りをを行う祭場と炊事を行うトーグラに空間の機能分化が認められることである³⁸⁾。しかし、現在は居住機能とともに祭祀場としての機能も失い、集会所や倉庫として使われているトネヤがある³⁹⁾。

7.2 トネヤの形態

トネヤの建築様式によるミャーの類型は、5タイプあるが、トネヤそのものの建築類型は一棟型と分棟型の2タイプに集約される。

（表6） 分棟型は一般民家と大差ないので、本節では一棟型のトネヤ5棟のうち、阿多地、嘉入の金久、薩川のトネヤを対象として⁴⁰⁾その空間構成を検討した。

1) 平面形は「神の家」の形である正方形もしくはそれに近い形状である。四面には窓がなく閉鎖的な空間となっている。トネヤのこのような空間的閉鎖性は、個人住居としての性格が招来したものと推定される⁴¹⁾。（表6）

2) トネヤの建築形態の成立過程は、次の3点から正方形平面を持つ「神の家」がグジ屋敷から次第に分離独立していった過程とみなされる。①グジは神祭りの際の唯一の男性神役である。②グジは集落発祥の地である里に住む宗家など旧家の戸主が代々世襲するものが多い。（図2） ③グジが住む屋敷（グジ屋敷）内で神祭りが行われてきた⁴²⁾。

3) トネヤの建築形態の変容過程は、分棟型トネヤが集落発祥地

図1 トネヤの建築様式によるミヤの配置構成モデルと実例

(注) 本図のA～Dと表3のA～Dは一致する。

図2 奄美大島西部地域における集落の空間概念モデル

表3 トネヤの建築様式によるミヤの類型

トネヤの建築様式による ミヤの型		集落の空間概念モデルの型				ミヤー数の 合計
		海岸線交差型		海岸線平行型		
		ミヤー数	ミヤー名	ミヤー数	ミヤー名	
A	分棟型トネヤ型 ミヤー	3	嘉入の里 於斎の上 勝能	2	阿室 三浦	5
B	一棟型トネヤ+グジ 屋敷型ミヤー	4	阿多地 須子茂の里 芝 武名	0		4
C	一棟型トネヤ型 ミヤー	3	嘉入の金久 須子茂の金久 薩川	1	木慈	4
D	分散型ミヤー	2	瀬武 屋鈍の上	2	瀬相 宇検	4
E	トネヤの存在が不明	4	3集落	6	5集落	10
合計		16	—	11	—	27

(注) 1. 表中の数字はヶ所数を示す。単位：ヶ所
2. トネヤのうち現在は失われているが過去に存在し、形態が確認できたものは、建築様式の類型の対象に加えている。

表4 空間構成要素の配列型によるミヤの類型

集落の空間概念モデルの型						
ミャーの空間構成要素の配列型		海岸線交差型		海岸線平行型		ミャー数の合計
		ミャー数	ミャー名	ミャー数	ミャー名	
I	トネヤ>土俵>アシャゲ>大樹>ハマジヨグチ型	3	阿多地 須子茂の里 嘉入の金久	1	木慈	4
II	トネヤ>土俵>アシャゲ>大樹型	1	武名	1	阿室	2
III	トネヤ>土俵>アシャゲ型	1	薩川	1	三浦	2
IV	トネヤ>アシャゲ>大樹型	2	西阿室の里 西阿室の金久	0	—	2
V	トネヤ>アシャゲ型	3	嘉入の里 於斎の上 須子茂の金久	1	実久の コードネ	4
VI	その他	6	5集落	7	7集落	13
合計		16	—	11	—	27

(注) 1. 表中の数字はヶ所数を示す。単位：ヶ所
2. ミヤの空間構成要素のうち現在は失われているが過去に存在し、位置が確認できたものは、配列型の類型の対象に加えている。
3. VIその他は、ミヤの空間構成要素の配列型が確認できなかったものである。

である里のトネヤに多い一方、一棟型トネヤが新開地である金久のミャーに多いこと⁴⁰⁾から、分棟型トネヤ、一棟型トネヤ+グジ屋敷、一棟型トネヤの順であったと推定される。

8 アシャゲとトネヤの関係

ミャーの主要素であるアシャゲとトネヤは、集落居住者の世界観が凝縮して表現される収穫祭りやノロ祭祀などの信仰祭祀の場所として祭りの種類に応じて使い分けられる。トネヤではトネヤ内の祭場で行う祭祀はもとより、アシャゲで行う神祭りの際の神饌も調理する⁴¹⁾。このことからアシャゲとトネヤの関係は密接であると考えられる。そこで、両者の関係を空間的に検討するために両者が現存しているもの、もしくは集落地図や写真などで過去の状況が確認できるものを対象としてその相対的位置関係や出入り口の向きなどを検討した。(表5、表6、表7)

8.1 アシャゲとトネヤの相対的位置関係

1) アシャゲとトネヤの間隔は、6~23m、平均 15m で神饌の調理配膳を考慮した距離であると考えられる。(表7)

2) アシャゲのトネヤに面する出入口(以下、トネヤ面出入口と略す)は、木窓と阿室を除いてカミヤマ方向を指向する。(表5、表7)

3) トネヤのアシャゲに面する出入口(以下、アシャゲ面出入口と略す)は阿室を除いてハマ(ネリヤ)(6ヶ所/7ヶ所)を指向する。(表6、表7)

4) アシャゲのトネヤ面出入口とトネヤのアシャゲ面出入口の関係は、正対するものが3ヶ所、斜交いに向かい合うものが3ヶ所、その他1ヶ所であった。正対するものは、一棟型または一棟型+グジ屋敷型に多く見られる。(表7)

一棟型トネヤは出入口を二つもち、そのうちの一つは、カミニン

表5 奄美大島西部地域におけるアシャゲ一覧 その1

建物概要	集落名	実久	コドネ	阿多	須子茂	須子茂	須子茂	須子茂
		フードネ			ナハマ(里)のアシャゲ	アナタリ(金久)のアシャゲ	里のアシャゲ	金久のアシャゲ
平面図 ³⁾								
立面図 ⁴⁾								
建築年代		平成10年・11年建替え	昭和63年頃再建	昭和10年代建替え	昭和52年再建	昭和52年建立	不明	昭和50年
場所の移動の有無		なし	なし	なし	なし	なし	なし	なし
出入口		三方	一方	二方	四方	三方	四方	四方
神棚の方向		カミヤマ(ティルシヤマ)	南西	なし	なし	なし	なし	なし
拝む方向		カミヤマ(ティルシヤマ)	南西	カミヤマ(オボツヤマ)	不明	不明	不明	不明
平面の大きさ		211 X 211cm	368 X 274cm	374 X 375cm	398 X 398cm	284 X 284cm	不明	380 X 380cm
柱の基礎		礎石を伴う	布基礎	礎石を伴う	礎石を伴う	礎石を伴う	堀立柱	礎石を伴う
壁 ⁵⁾		なし	スク 1 本	スク 2 本	なし	スク 3 本	なし	なし
床材		珊瑚・砂利	コンクリート	角材	コンクリート	板	土	コンクリート
屋根の形・材料		寄棟・トタン	切妻・トタン	寄棟・トタン	切妻・トタン	寄棟・トタン	寄棟・トタン	寄棟・トタン
建築類型 ⁷⁾		その他	差屋型	差屋型	その他	差屋型	穴屋型	その他

表5 奄美大島西部地域におけるアシャゲ一覧 その2

建物概要	集落名	薩川	瀬武	木懸	武名	三浦	瀬相	宇換	阿室
平面図 ³⁾									
立面図 ⁴⁾									
建築年代		平成4年	平成2・3年建替え	約20年前	昭和46年建替え	約60年前	平成4年	昭和31年上棟	昭和33年上棟
場所の移動の有無		あり	あり	なし	なし	なし	なし	なし	なし
出入口		一方	四方	三方	四方	三方	一方	三方	三方
神棚の方向		なし	カミヤマ(オボツヤマ)	なし	なし	なし	なし	東	カミヤマ(モリヤマ)
拝む方向		不明	カミヤマ(オボツヤマ)	不明	カミヤマ(オボツヤマ)	中柱	不明	不明	カミヤマ(モリヤマ)
平面の大きさ		197 X 180cm	305 X 360cm	472 X 566cm	204 X 292cm	376 X 568cm	376 X 396cm	364 X 364cm	549 X 456cm
柱の基礎		礎石を伴う	堀立柱	礎石を伴う	堀立柱	礎石を伴う	礎石を伴う	礎石を伴う	礎石を伴う
壁 ⁵⁾		腰壁あり	西隅のみ板壁	スク 3 本	なし	スク 1 本	スク 5 本	板壁	腰壁あり
床材		コンクリート	土	板	コンクリート	板	角材	板	コンクリート
屋根の形・材料		片流れ・トタン	寄棟・トタン	寄棟・トタン	寄棟・トタン	寄棟・トタン	寄棟・銅板	入母屋・トタン	寄棟・トタン
建築類型 ⁷⁾		その他	穴屋型	差屋型	差屋型	差屋型	差屋型	差屋型	その他

[註] 1. 1999.8, 2000.8 実測調査。

2. 参考文献

(1) 松原武実・高橋一郎「加計呂麻島ノロ祭祀調査報告(旧久米村編)」1999.3 南日本文化研究所

(2) 高橋純一「奄美伝統文化の変遷過程」1997 国書刊行会

(3) 池沼三「祭儀の空間」1979.1 相模書房

3. 平面図のインデックス(▲: トネヤ面の出入口 △: その他の出入口 ←: カミヤマ方向 ⇐: ハマ方向)

4. 中柱: 中柱は構造的には必要であるが、祭祀の祭壇的な役割を果たす象徴的性格が強い柱である。

5. 壁: アシャゲにはほとんどの場合、壁を設けない。但し、スクと呼ばれる柱を貫く横木をつけることが多い。

6. アシャゲの立面図は、アシャゲの平面図の下方から見た図である。

7. アシャゲの建築類型: 池沼三氏の建築類型による。(文献(3) PP39~48)

表6 奄美大島西部地域におけるトネヤ一覧

集落名	阿多	嘉入の金久	薩川	芝	木慈	阿室	嘉入の里
建物概要							
平面図 ²⁾							
立面図 ³⁾							
建築年代	不明	昭和43年頃	平成4年	昭和44年再建	昭和52年建替え	不明	昭和21年以前
場所の移動の有無	不明	不明	あり	あり	なし	不明	なし
出入口	二方	二方	二方	四方	二方	四方(オモテのみ)	四方(オモテのみ)
神間の方向	南	なし	カミヤマ(オボツヤマ)	なし	なし	カミヤマ(モリヤマ)	西
拝む方向	南	不明	カミヤマ(オボツヤマ)	不明	不明	カミヤマ(モリヤマ)	西
平面の大きさ	370 X 378cm	375 X 375cm	390 X 390cm	264 X 261cm	870 X 482cm	575 X 680cm(オモテのみ)	594 X 680cm(オモテのみ)
柱の基礎	礎石を伴う	礎石を伴う	礎石を伴う	掘立柱	礎石を伴う	礎石を伴う	礎石を伴う
壁 ⁴⁾	板壁	板壁	板壁	なし	板壁	板壁	板壁
床材	板	板	板	珊瑚	畳 および 板	畳 および 板	畳 および 板
屋根の形・材料	寄棟・トタン	寄棟・トタン	入母屋・トタン	入母屋・トタン	寄棟・トタン	寄棟・トタン	寄棟・トタン
建築類型 ⁵⁾	一様型	一様型	一様型	一様型	一様型	分棟型	分棟型

〔註〕1. 1999.8, 2000.8 実測調査。但し、阿室は1995.11西日本工科大学研究室実測調査。

2. 参考文献

(1) 松原武夫・高橋一郎「加計呂麻島ノ祭祀調査報告(旧実久村編)」1999.3 南日本文化研究所

(2) 高橋統一編「奄美伝統文化の姿容過程」1987 国書刊行会

3. 平面図のインデックス(△: アシャゲ面の出入口 △: その他の出入口 ◀: カミヤマ方向 ▶: ハマ方向)

4. 中柱: 中柱は構造的には必要であるが、祭祀の祭壇的な役割を果たす象徴的性格が強い柱である。

5. 壁: トネヤには、ほとんどの場合、壁を設ける。

6. トネヤの立面図は、トネヤの平面図の下方から見た図である。

7. トネヤの建築類型: トネヤの平面形状による。

ジョ(神役の人達)⁴⁵⁾や神霊のための出入口であり、他の一つは、神饌作りなど祭りの準備をするアタリ(当番)などのための出入口であるとみられる⁴⁶⁾。これは前稿⁴⁷⁾で明らかにした本地域集落の伝統的民家(分棟型民家)のオモテとトグラにみられた晴一襲の空間秩序に符号するものである。

アシャゲの原型を稲積みとすると、その位置は当初、田の中や田の隣接地にあったと推定される。アシャゲは後に田から切り離されて象徴化された稲作儀礼の祭場としてミャーで再現されたと推測される⁴⁸⁾。このようなアシャゲの性格が、アシャゲをトネヤよりも田に近い場所に建てることやミニャクチ祭りのナーヒキ(縄引き)⁴⁹⁾で田の方向またはアシャゲ方向へ引く女性を勝たせることなど、ミャー空間に指向性をもたしている。

表7 アシャゲのトネヤ面出入口とトネヤのアシャゲ面出入口の間隔と向き

集落名 (ミャー名)	アシャゲ・トネヤ 間隔(m)	アシャゲのトネヤ面 出入口の向き			トネヤのアシャゲ面 出入口の向き			アシャゲのトネヤ面 出入口とトネヤの アシャゲ面出入口の 関係
		カミ ヤマ	その他	合計	ハ・ ネリヤ	その他	合計	
阿多	6	1	—	1	1	—	1	斜め向かい合わせ
須子茂 里	17	1	—	1	1	—	1	ほぼ正対
須子茂 金久	11	1	—	1	1	—	1	ほぼ正対
嘉入 里	20	1	—	1	1	—	1	斜め向かい合わせ
嘉入 金久	21	1	—	1	1	—	1	ほぼ正対
木 慈	7	—	1	1	1	—	1	斜め向かい合わせ
阿 室	23	—	1	1	—	1	1	同一方向
合 計	105	5	2	7	6	1	7	—
平 均	15	—	—	—	—	—	—	—

(注) 1. 表中の数字はアシャゲとトネヤの間隔以外はヶ所数を示す。単位: ヶ所

2. アシャゲとトネヤの間隔は、一様型トネヤの場合はアシャゲのトネヤ面出入口とトネヤのアシャゲ面出入口間の直線距離を、分棟型トネヤの場合はアシャゲのトネヤ面出入口とトグラのアシャゲ面出入口間の直線距離を1/2000集落図上で計測したものである。

8.2 アシャゲとトネヤの共通点と相違点

アシャゲとトネヤはミャー内に並存する祭祀場でありながら、その形状には大きな違いがある。このような違いはどのような空間概念の違いから生じたものなのかを分析するために、両者の相違点と

共通点を整理した。(表8) その結果、表8の右欄に示す対比や指向性といった概念が存在することが明らかになった。両者の相違点の多くは、これらの空間概念から生じたものと推定される。

アシャゲを海側または田のある側に、トネヤを山側に建てるという立地条件の違いは、アシャゲの田への指向性やネリヤへの指向性⁵⁰⁾、トネヤのカミヤマへの指向性⁵¹⁾および集落の表一奥の対比⁵²⁾などの空間概念から生じたと考える。

両者の機能上の違いは、その発生過程の違いや祭る神の違いから生じている。アシャゲは稲積みを起源とし、稲作儀礼を主に行う単一的機能を果たすのに対して、トネヤはグジの住居を起源とすることからオモテで行う祭祀に加えて、トグラでの居住・神饌準備という複合的機能を果たすという特徴がある⁵³⁾。

両者の形態上の違いは、その発生過程の違いや利用季節の違いから生じたと考える。アシャゲは稲積みという稲穂を乾燥させるのに

表8 アシャゲとトネヤの相違点と共通点

	比較項目	アシャゲ	トネヤ	読み取れる空間概念
		海側に立地	山側に立地	ネリヤ・カミヤマ、表一奥、田への指向性
相 違 点	立地条件	海側に立地	山側に立地	ネリヤ・カミヤマ、表一奥、田への指向性
	機能	祭祀場としての単一機能	祭祀場と炊事場としての複合機能	単一複合
		居住機能なし	グジの住居	非居住一居住、晴一襲
		稲霊の祭り (アラホバナ、ミニャクチ)	イモ霊の祭り (フエウメ)	田一畑、夏一冬、女一男 ³⁾
	形態	開放型	閉鎖型	透過一遮断、透過一選択透過
点	更新	土間床 ¹⁾ 又は高床	高床	トグラ一オモテ
	更新	毎年更新 ²⁾	随時更新	更新一安定
	共通点	ミャーの主要空間構成要素	ミャーの主要空間構成要素	聖属性
共 通 点	機能	神祭りの祭祀場	神祭りの祭祀場	同上
	形態	正方形又はそれに近い長方形	正方形又はそれに近い長方形	同上
	管理・運営	グジが管理、カミニンジョが祭祀を施行、アタリが祭りの準備と補佐役	グジが管理、カミニンジョが祭祀を施行、アタリが祭りの準備と補佐役	同上

(注) 1. アシャゲの床は差屋型を除きすべて土間であったこと、その祭儀の意味については、文献8) p249, 257参照

2. 文献8) p90, 91

3. ミニャクチの祭りに行われる縄引きは、女子が田のある方向ないしはアシャゲ方向、男子が反対方向ないしはトネヤ方向に引いていく。文献4), 5), 6), 15), 16), 17), 20)

4. 文献8) p92, 93

都合のよい形を踏襲し、稲霊などの神々が自由に出入りし、通風がよい夏季に快適な開放的形態を示す。一方、グジの住居を起源とするトネヤは、ネリヤ・カミヤマの神々を招来するとともに⁵⁴⁾祭祀妨害者や悪霊に対して遮断するという人間や神霊に対する選択透過的形態を示す。その結果、両者の間に透過—遮断ないし透過—選択透過という形態上の対比概念が生ずる。これらの空間概念は、晴—曇の対比やカミヤマ・ネリヤへの指向性等分棟型民家の空間秩序⁵⁵⁾に合致するといえる。(表8)

9 その他の信仰祭祀空間の種類と形態的特徴

本地域の集落内で、文献によって存在が確認できる信仰祭祀空間は、自然のものとしてカミヤマ、ハマ、イズミ、ゴー(川)、オデー(御獄)、大樹、ネリヤなどがあり、人為のものとしてミャーの他、カミミチ、神社、墓所、モーヤ(喪屋)などがある。

すでに述べたミャー以外の信仰祭祀空間のうち、これまで行った本地域における集落調査結果⁵⁶⁾と補足資料⁵⁷⁾で明らかになったものについて空間秩序を考察すると以下になる。

1) 各集落ごとに独自のカミヤマがあり、近年までカミヤマ信仰やネリヤ信仰⁵⁸⁾が盛んであった。これらの信仰に関わる祭祀空間を現存させる集落は特に加計呂麻島に多い。

2) 道路パターンはT字路や食違い型四差路など悪霊を避けるため独特の形態をしている⁵⁹⁾。人間が通る道とともに神が通るとされるカミミチを設ける。カミミチはカミニンジョがカミヤマとミャーおよびハマを行き来することによってつけられた道で、カミヤマからミャーを経て浜にまで通じているのが基本形である。(図2)

3) 葬列はオモテの縁側一門ローハマジョウグチーハマー墓所と決められた経路を往復し、参列者は帰途ハマで身を清める。ハマはハマオリ行事を通じて集落居住者が交歓する場所であり、生者が先祖の霊と出会う場所でもある⁶⁰⁾。ハマではかつて渡来神の送り迎え(ウムケ・ウホリ)の行事も行われていた⁶¹⁾。このようにハマは生死の境であり、浄化や再生が繰り返される神聖な場所として認識されている。

10 信仰祭祀空間群の配列

以上の信仰祭祀空間は、多くの集落でカミヤマとハマオリ浜ないしはミャー(信仰祭祀の広場)を結ぶ直線(以下、信仰軸と呼ぶ)に沿って配列される。その配列の順序は、カミヤマ>拝所(神社)>カミミチ>ミャー>ハマ>ネリヤとなる。このような信仰祭祀空間の配列則は、本地域における集落居住者の信仰・聖穢・晴曇・死生観などの観念を基底として成立している⁶²⁾。

11 結論

奄美大島西部地域の集落における信仰祭祀空間の空間秩序を、ミャーの配置構成、ミャーの主要素であるアシャゲとトネヤの空間構成、両者の相互関係を中心に解析した結果、以下の知見を得た。

1) 集落の発祥の地と言われる里のミャーに分棟型トネヤを擁する形式および分棟型トネヤとともに一棟型トネヤを擁する形式が多いこと、グジ屋敷でもある分棟型トネヤのオモテとトーグラに見られる晴—曇等の空間秩序が凝縮された形で一棟型トネヤとアシャゲの関係にも認められたことから、ミャーの原型は集

落に最初に住みついた宗家の屋敷であったと考える。宗家の屋敷で行っていた神祭りが、分家による集落拡張の過程でより大規模化するにつれて宗家の建物内では収容し切れなくなると、屋敷隣接地にアシャゲや一棟型トネヤを建てて現在見られるような里のミャーが形成されたと考えられる。その後、さらに集落が拡張されると、別の場所にアシャゲや一棟型トネヤを建てて金久のミャーを形成したと推定される。

- 2) ミャーの空間構成要素の配列には、カミヤマやネリヤへの指向性、カミヤマに近いトネヤを上位とみる信仰観念、ハマジョウグチを出入口としトネヤを奥とする表と奥等信仰軸を基軸とした空間概念が投影されていると推察される。
- 3) アシャゲの開放的形態は、聖屋として神々の自由な出入りや境界や門として来訪者と居住者との交流を表徴したものである。
- 4) 一棟型トネヤは、その建築形態の類型およびその出入口の配置からグジ屋敷の形式を踏襲したものとする。また、一棟型トネヤの閉鎖的形態は、ネリヤ・カミヤマの神々を招来するとともに祭祀妨害者や悪霊に対して遮断するという選択透過的姿勢を表徴したものであると考える。
- 5) アシャゲとトネヤの形態の違いは、立地条件に関するネリヤとカミヤマの対比、機能に関する単一と複合の対比、建築形態に関する透過と遮断ないし透過と選択透過の対比などの空間概念が投影されたものであると考える。
- 6) アシャゲとトネヤはそれぞれの出入口を互いに向け合うことによって、両者を空間的・機能的に密接に関係付ける配置構成となっている。
- 7) アシャゲとトネヤに挟まれた空間は、ここを中心としてアシャゲの背後にはネリヤが、トネヤの背後にはカミヤマが控え、神祭りの際にはネリヤ神、オボツ神、カミニンジョ等の神々がカミミチを通して来訪する特別な意味を持つ空間へと転化する。

以上より、ミャーの空間構成要素の配置や主要素であるアシャゲやトネヤの配置や形態には、アシャゲ・トネヤ間の表—奥、晴—曇の対比、アシャゲの稲霊やネリヤへの指向性、トネヤのカミヤマへの指向性等の空間概念が顕在している。これらの空間概念は、本地域集落のミャーを中心とする信仰祭祀空間にとどまらず、集落空間全体を秩序づけていると結論づけられる。

なお、民家、信仰祭祀空間および集落の変容過程に関する考察は、稿を改めて論じたい。

注記

- 1) 文献1)
- 2) 本研究では奄美大島の瀬戸内町及び宇検村の範囲をこう呼んでいる。
- 3) 文献2) p 8,34,51
- 4) 奄美大島のカミヤマは、オボツヤマ、モリヤマ、テラヤマ、グンギンなど多種多様である。本稿で対象とした奄美大島西部地域は、集落ごとにオボツヤマがあり、しかも複数のカミヤマをもつ集落も少なくない。カミヤマは集落における最も神聖な場所として崇められてきた場所であるが、本稿ではその空間秩序について以下の理由から論考していない。カミヤマには山麓のカミミチ沿いに拝所や神社、集落創始者の墓等が設けられる以外は人工物が設けられることは稀であった。また、カミヤマは神職以外の人々にとってその大部分が不入域であったことから、遥拝の対象ではあっても集落祭祀の主要な場所ではなかった。

- 5) 本文 5.1 参照
- 6) ミャーを構成する主要素の一つ。主に稲霊を祭る聖屋
- 7) ミャーを構成する主要素の一つ。村落の神であるトネヤ神や火の神、イモ霊を祭る聖屋
- 8) 集落の唯一の男性神役で、宗家など旧家の戸主が代々世襲する者が多い。
- 9) カミミチは神の通る道の意で、カミヤマから祖霊神が、ネリヤからネリヤ神がミャーを訪れ、ハマから再びカミヤマとネリヤへ帰っていく道となる。実用的にはノロを始めとするカミニンジョ（神役の人達）が往来する道として家々の間や畑の傍らに特別に設けられ、一般の人の通路としては用いられない。現在、カミミチは筆者らが調査した表 2 の 21 集落のほとんどの集落では、敷地と敷地の間の幅 1 メートルに満たない隙間として断片的に残されている。(文献 6) p31、文献 7) p126,129)
- 10) 文献 3) ～7)
- 11) 文献 8) pp29～30
- 12) 文献 9)
- 13) 文献 8) pp28～29
- 14) 文献 10) p147、文献 11) pp398～420
- 15) 文献 6) p30、文献 12) p16、文献 13) p30,31
- 16) 文献 8)
- 17) 文献 14) VI の 3. アシャグの形態と機能
- 18) 文献 8) pp39～48
- 19) 文献 14) pp304～306
- 20) 文献 4) p95、文献 6) p32、文献 14) p277, p307
- 21) 文献 9)、文献 15) p131
- 22) 文献 15) p131、文献 4) p65、文献 5) p573、文献 6) p32
- 23) 文献 14) p277
- 24) 文献 8) pp15～22、文献 16) pp322～341
- 25) 文献 6) pp30～40、文献 8) p22
- 26) 文献 8) p39
- 27) 文献 15) p132,133、文献 8) pp29～31
- 28) 文献 17) p60,189
- 29) 集落の空間概念モデルの型とは、集落の信仰軸（カミヤマとミャーまたはハマオリ場を結ぶ直線）と海岸線の関係によって集落の空間概念モデルを類型したもので、奄美大島西部地域では海岸線交差型と海岸線平行型の 2 タイプがある。(文献 18)、文献 19))
- 30) 文献 13) pp24～36 に見られるようにかつては盛大に行われていた集落祭祀も、過疎化が進んだ現在ではどの集落でも豊年祭の 8 月踊りが土俵の周りで行われる程度である。
- 31) その他、芝、木慈、阿室、屋鈍の下などのミャーもこの例である。
- 32) 文献 6) pp198～209, pp259～265、文献 8) p19,20, pp158～166
- 33) 文献 5) p574
- 34) 文献 10) p147,148、文献 8) p249,257
- 35) 文献 8) pp39～50
- 36) アシャグは全て平家であり、その平面形は「神の家」の形である正方形もしくは長方形に限られる。その大きさは標準値と言われる 2 間ないし 2.5 間 (3.6～4.5m) 四方を大きく逸脱するものはない。(文献 8) p59)
- 37) 池浩三氏は、八重山諸島に残るシラ（稲積み）とアシャグの形態の類似性、毎年の更新習慣の共通性から、「神アシャグの形態規範は稲積みのそれを踏襲したものである。神アシャグは稲積みであるシラを原型とし、高倉という建築形態へ発展する過程で、祭場として機能分化したもの」と述べている。(文献 8) p80,81,92,93
- 38) その例として、嘉入の里、於斉の上、阿室の各トネヤがあげられる。
- 39) その例として、嘉入の金久、阿多地、木慈の各トネヤがあげられる。
- 40) 芝のトネヤ RC 造の新しい建築様式であること、木慈のトネヤは分棟型のオモテとトوغラの形式を残したまま一棟化した特殊な建築様式であるので今回の検討の対象から除外した。
- 41) トネヤが祭場化したのは、島津藩の祭祀に対する圧迫があつて後のことである。(文献 7) p192、文献 8) p29
- 42) 文献 6) p31,35,104、文献 8) p31、文献 20) p74,82
- 43) 文献 18) 表 1 集落の空間概念図 (平面) 参照
- 44) 文献 8) p22、文献 20) p74
- 45) カミニンジョは神祭祀に参加する特定の資格を持つノロなどの女性とグジヌシと呼ぶ男性の世話役を含めた祭りの集団をこのように呼ぶ。グジヌシが日常的にアシャグやトネヤの管理をする。カミニンジョ以外では神祭りのとき、神饌の準備や祭りの補佐をするアタリと呼ぶ当番制の補助役がいる。(文献 15) pp134～137
- 46) 鹿児島県教委企画ビデオ「奄美のノロの祭り」1987 民俗文化研究所
- 47) 文献 1)
- 48) 宇検村部連のミニャクチは、元は田の水口で行っていたが、現在は公民館脇に擬似田を作って代用するようになった。(文献 5) p319,320)
- 49) ナーヒキ（縄引き）は次の稲作の豊凶を占う作占いである。(文献 6) p204,205、文献 5) p322)
- 50) アシャグはその下の地面からネリヤに通じている。(文献 8) p249,257)
- 51) トネヤは神のいるカミヤマの代所となっている。(文献 8) p29)
- 52) 集落間道路が未発達時代には、海上交通が唯一の外界との交通手段であり、集落の門や玄関にあたるハマやハマジョーグチのある海側を表、それに対して山側を奥とみることができる。
- 53) 金久のミャーにみられる一棟型トネヤは、両方の機能を一棟に集約したものである。
- 54) 2 月のカムケ（神迎え）、4 月のカミオーホリ（神送り）は主にトネヤで行われる。(文献 8) p22)
- 55) 文献 1)
- 56) 文献 1)、文献 18)、文献 19)
- 57) 文献 3)、文献 6)、文献 7)、文献 11)、文献 17)
- 58) 海の彼方の国ニライカナイ（ネリヤ）の神に対する信仰 (文献 11) p101)
- 59) 直進してくる悪霊を避けるため、T 字路にして突き当たりに石敢當を設ける。
- 60) 文献 22)、文献 23)
- 61) 文献 8) pp15～19, p249
- 62) 本地域における集落の空間構成を、信仰軸と海岸線との関係で捉えると、海岸線交差型と海岸線平行型という二つのタイプの空間概念モデル (図 2) に類型化することができる。(文献 18)、文献 19)) しかし、このような形態上の違いはあっても、信仰祭祀空間の配列を含めて両タイプには共通の空間秩序が認められる。

参考文献

- 1) 永田隆昌ほか 3 名：奄美大島西部地域における分棟型民家の空間秩序 日本建築学会計画系論文集 No.555 2002.5
- 2) 石田英一郎ほか 1 1 名：日本民俗学体系 1 2 平凡社 1959.5
- 3) 長沢和俊：奄美文化誌 西日本新聞社 1974.10
- 4) 住谷一彦・ヨーゼフ・クライナー：南西諸島の神観念 未来社 1977.12
- 5) 下野敏見：南西諸島の民俗 II 法政大学出版局 1981.3
- 6) 小野重郎：奄美民俗文化の研究 法政大学出版局 1982.10
- 7) 仲松弥秀：神と村 島社 1990.7
- 8) 池 浩三：祭儀の空間 相模書房 1979.1
- 9) 岡田知子・長谷真行：阿室集落の空間構成要素について 日本建築学会大会学術講演梗概集 1996.9
- 10) 比嘉康雄：日本人の魂の原郷 沖縄久高島 集英社 2000.5
- 11) 谷川健一編：日本の神々 13 南西諸島 白水社 2000.7
- 12) 谷川健一：日本の神々 岩波書店 1999.6
- 13) 上野和男・大越公平編：現代のエスプリ 194 奄美の神と村 至文堂 1983.9
- 14) 高橋統一編：奄美伝統分化の変容過程 図書刊行会 1987
- 15) 鹿児島民俗学会編：奄美の島かへろまの民俗 第一法規 1970.11
- 16) 瀬戸内町誌編集委員会編：瀬戸内町誌 (民俗編) 瀬戸内町 1977.12
- 17) 松原武実・高橋一郎：加計呂麻島ノロ祭祀調査報告書 (旧実久村編) 南日本文化研究所 1999.1
- 18) 永田隆昌ほか 3 名：加計呂麻島旧実久村 14 集落の空間概念 日本建築学会九州支部研究報告 2001.3
- 19) 永田隆昌ほか 3 名：奄美大島西部地域 6 集落の空間概念 日本建築学会九州支部研究報告 2002.3
- 20) 山下欣一・湧上元雄：沖縄・奄美の民間信仰 明玄書房 1974.1
- 21) 野村孝文：南西諸島の民家 相模書房 1961.5
- 22) 恵原義盛・名嘉真勝：奄美生活誌 三陽社 1973.7
- 23) 恵原義盛：沖縄・奄美の葬送・墓制 明玄書房 1979.3

(2002年 7 月 9 日原稿受理, 2002年10月30日採用決定)